

6-1 加助松本城睨み天守傾く ガイド



1、貞享騒動（加助騒動）のあらまし

今を去る三百余年前の貞享3年（1686）、松本藩に起こった騒動である。時の藩主は水野隼人正忠直（11代城主、46年在任）で、参勤交代で江戸詰のため留守であった。

松本藩の年貢は近隣の藩に比べて厳しかった。即ち70年程前に松本藩領から分離した高遠藩西5千石や、諏訪領東5千石の村々は、その当時のまま粃1俵は玄米2斗5升挽き（1俵に5斗粃入り）であるのに、松本藩ではその後3斗挽き（1俵に6斗粃入り）に引き上げられ、水

野氏もそれを受け継いで、農民は仕方なく3斗挽きに耐えていた。近年不作が続いて困窮を極めていたのに、この年の収納に当っては、のぎ踏磨きと3斗4・5升挽き（粃1俵に6斗8升～7斗入り）を厳命してきた。

このような苛酷な年貢に苦しむのを見るに忍びず、身を挺して農民を救おうと、多田加助を首領とする同志は、10月10日夜、中萱の権現の森（熊野神社）に集まって密議し、両5千石並の2斗5升挽きの要求など5ヶ条の訴状をしたため、14日郡奉行へ訴え出た。この企てが村々へ伝わると、農民達はこれに加勢しようと、蓑笠に身を固め鋤鍬を手に、四方から城下へと押し寄せた。

この突然の大騒動に狼狽（ろうばい）した家老達は、鎮圧するためいろいろな策を講じたが農民は聞き入れず、日増しにその数は増加して万余におよんだという。

困惑した藩側は16日夜、郡奉行名で粃納めは従来通り3斗挽きでよく、のぎ踏磨きは無用、など願いを聞き届ける旨の覚書を組手代へ届けた。これを知らされ説得された農民の大半は村々へ引き上げた。しかし加助ら同志と百数十人の農民は、あくまで2斗5升挽きの要求と家老の証文を求めて居残っていた。

家老らは騒動の長引くのと、江戸表への直訴を恐れて18日に、2斗5升挽きをも聞き届ける旨の家老連判覚書を出したので、加助ら同志と居残っていた農民は、一応安堵して村々へ引き上げ騒動は鎮まった。

ところが藩ではその後、村々へ先に渡した覚書を返上させ、一方江戸へは真相を秘して注進した上、藩主の裁許を得て頭領らとその子弟を一斉に捕縛して上土の牢舎へ投獄した。そして数日後の11月22日、安曇の者は勢高で、筑摩の者は出川の刑場で処刑された。その刑は磔8人、獄門20人という極刑で、百姓一揆稀にみる犠牲者多数であった。

2、傾いた城伝説・・・「・・・血ばした目で天守をぐっとぬらみつけました。その瞬間・・・」

多田加助を中心に1万人もの農民が、年貢を減らしてほしいと松本に集まってきました。あわてた武士たちは、何とかこれをおさめようと考えました。農民たちの要求をいくつか受け入れ、それを書いた紙を農民たちに示したのです。さわぎを起こした罪で、多田加助をはじめ中心となった人たちは、はりつけの刑にされることになりました。

加助がはりつけをされる場所には多くの人びとが集まり、念仏をととなえたり、罪を許してくれとさげんだり、最後にはみなが大声で泣き出しました。「みなものしゅう、わしはみなもの年貢が減らされるのだから、安心して死んでいく。さらば。」と、加助がいうと、人びとの中から「残念ながら、約束の書かれた紙は、おぬしがろうやに入れられた日に役人に取り上げられた。」とおしえる声があがりました。加助は「2斗5升、2斗5升、2斗5升…」と怒りに満ちた声でさげぶと、血ばした目で天守をぐっとにらみつけました。その瞬間、恐ろしい地ひびきとともに天守が西にかたむいたのです。

加助の血の叫びが天守を傾かせたという伝承は？

「百姓衆の難儀を見るに忍びず、いささか思い立ち候事も、今は無益となり候、たとへ嘉助この

世を去り候とも、五分摺二斗五升は、我等百姓の志に候。何時かは嘉助らの申す事事実となり候。(中央公論『日本の歴史十五』昭和41年4月)

3、義民伝説の成立

「嘉助騒動」とか「貞享義民」というまとまった記録は、江戸時代には見当たらない。騒動から40年後の享保10年(1725)7月28日、6代目藩主水野忠恒(ただつね)は、殿中において酒乱発狂、松の廊下で刃傷沙汰におよび、改易されるという大事件をおこした。この事件に結びつけて「嘉助等の祟り(たたり)だ」という言い伝えがあるが、これも江戸時代の記録には今のところみあたらない。また刑場で槍の穂先が、嘉助の腑から首へ突き刺さった時、「皆の衆!年貢は五斗入れ、二斗五升だぞ!」と、ものすごい形相で絶叫したことも、「またカット目を開き松本城を睨んだ時、天守はぐらっとして西に傾いた」という記録も見当たらない。

では貞享騒動の犠牲者を公然と顕彰するようになったのは、明治維新後の自由民権運動による「義民顕彰運動」の中で始まったと考えられている。

4、戯曲「^{みんけんかがみ}民権鑑^{かすけ}嘉助の^{おもかげ}面影」松沢求策作等にもみる



台本

貞享3年の百姓一揆の指導者多田加助をモデルに、松沢求策は脚本を書き、上演した。民権劇は松本・穂高・塩尻などでも上演された。

安政2年(1855)

現在の穂高町に生まれる。東京遊学後、武居用拙(ようせつ)に学ぶ。「松本新聞」(前身は「信飛新聞」)の編集長となり、奨匡社(しょうきょうしゃ)結成の中心となり、自由民権運動を推進した。



松沢求策

民衆に対して新聞や演説によって民権を説くよりも、演劇によって上演して、心情に訴えて理解してもらおうと考えた。明治10年5月に松沢求策は、「時を得て薫る深山の埋木」と題した加助騒動をテーマにした脚本を書き、村祭りに上演しようと考えていた。「水野館の段」「中萱村の場」など12幕に手直しして「民権鑑嘉助の面影」と改題し、上演して民権思想を広めようとした。戯曲九段目「仕置の場」には「松本城のあなたに土方(家老)めがと、はたと睨めし眼光に城もこなたへゆるゆるかと思ふ計りに見へにけり」と、初めて松本城天守が恨みの対象として伝説の中に出てきている。しかし以後の書物のなかには、刑場の様子が書かれているのみで、天守が揺れたり、傾いたという表現は見当たらない。

大正5年の「義民加助」(半井桃水)には『天守は西に傾いた、水野の運も傾いた、嘉助が魂魄(こんぱく:たましいの意)の死なぬ証拠じゃ』をみると、大地震動し天守は西に傾いたという記述が出てくる。この頃には天守の傾きは直っていた。

昭和8年刊の「松本市史」下には「……松本城を睨むと同時に、恐ろしい地震がして、天守閣は西に傾き、藩吏は恐れおののき、会衆の念仏頻りに起こる」と記述されていて、初めて「天守閣は西に傾いた」ことが加助の怨念によるもので、ここに天守閣傾城伝説が完成した。

松本城天守閣は、旧物破壊の受難を逃れ、明治14年・5年頃より傷みが激しくなり、傾き始めてきた。ちょうどこの頃に中萱加助伝承が浮かび上がってきたのである。

『二斗五升 語り伝えよ 稲の波』